

臨床心理学における idiographic approach について

小 花 和 昭 介

Idiographic Approaches in Clinical Psychology
Syosuke OBANAWA

I

「心理テストは本当にあたりますか」という素朴な問いかけは、実は代表的な難問の一つである。この質問は、多くの場合、予測的妥当性 (predictive validity) を求めるものであるが、問題は、それが特定の個人についての具体的な予言を期待しているところにある。現在の、特に psychometric なテストは、集団としての統計的傾向性についてはともかく、個人の具体的な行動の予測については、誠に無力と言わざるを得ない。

例えばある種の非行予測の検査によって、被検者群を危険域と安全域の二集団に分けられたとしよう。何年かの追跡調査の結果、危険域集団の中から、安全域集団よりもはるかに多くの非行者が見出されたならば、この検査は、非行の予測についての妥当性をもっていたと考える。しかし、両集団とも非行者の出現率は、100%でもなければ0%でもないのが普通である。その中で、特定のある個人が非行を犯すかどうかは、集団としての非行出現率によって確率的に表現するしかない。A少年の非行予測検査の得点が、100人中80人が非行を犯す集団の得点域に入っていたという理由から、A少年には80%の非行可能性があると評価したところで、それはこの少年にとって、一体何を意味するのであろうか。Aと同じ立場の少年が100人集ったら、そのうち80人は非行に陥るだろう、これは危険な少年群だ、いう判断は正しい。しかしこのことは、A少年の内的力動性とは何の関係もない。だから、この少年が将来罪を犯しても犯さなくても、ともに必然的であり得るのである。

実際の心理臨床活動は、これほど単純なものではない。各種のテストを併用し、投影法や生活史を総合的に解釈して、個人の内的生活を力動的に明かにしようとする。これは、いわゆる個性記述的 (idiographic) な接近法であり、その中の segmental なテストの意味は、まさに一部の参考資料でしかない。A少年の非行性について臨床的に解明するということは、この少年についての idiographic study に外ならないのである。group norm による相対的位置づけによる予測は、actuarial であって、clinical ではない。従来、idiographic approach と nomothetic (法則定立的) approach との二分法については、多く personology の科学論的議論の中で問題にされて来た。この小論では、この二分法をめぐる議論を概観し、idiographic approach をもって、臨床心理学とその実践活動との本質的特性とみなしたい。

II

nomothesis と idiograph の対立は、用語の違いこそあれ、かなり古くから取り上げられて来た。J.S. Mill の psychology と ethology, Dilthey の explanatory psychology と understanding psychology, Windelband の nomothetic science と idiographic science などが代表的な例であろうが、近年では、Rosenzweig が idiodynamics (個性力学) を、G. W. Allport が morphogenic (形態発生的) psychology

を強く主張している。

Allport によれば¹⁾、自然科学としての心理学の関心は、個人を越えた commonality であり、comparability である。従って、個人を横切る horizontal dimension としての諸事象、即ち、知能、不安、向性、適性などの共通的特性が研究対象となる。その一方、それらが例えばビルにおいてどの様に形造られて (patterned)、ビルのまさにビルたる由縁のもの (“the Billian quality of Bill”) を成しているか、といった vertical dimension は等閑にふされていたと言う。「ビルとのつき合いは、そこから何らかの hypothesis を引き出すまで続けて、それから、やおら抽象の王国にカモシカの如くにとび込む。その時は、ビルから testable proposition を引き出してもって行くが、structural unit としての彼についての coordinated knowledge はもって行かない。一事例というのは、跳躍台として寛大に扱われるだけである」(1, p.406)。

彼は、dimensional approach を否定しているのではない。ただ、跳躍台にしかすぎない個別例の扱いに対して、それでは、“increasing man's understanding of man”という心理学の目標 (A P A, '59) の半分しか果せていないと主張しているのである。“man in general”に対して、“man in particular”もまた重要な課題である。この重要な半分を見逃してまで、自然科学の手続きに隷属しなければならないのか、と問うているのである。この重要な 半分を、dimensional psychology に対して、morphogenic psychology と彼は名付けた。

同様の領域あるいは接近法を、Rosenzweig は idiodynamics と呼んでいる⁷⁾。彼は、心理学の理論の中で individual の占める位置あるいは役割によって、三段階を区分した。第一は、segmental な行動の普遍的原理が適用出来るような、一般化された人間の代表として個人が描かれる段階。第二に、統計的に理解された集団の、多かれ少なかれ不可分の成分として個人がみられる段階。そして第三段階では、個人は、統計的分析と dynamic conceptualization の両方を受ける母集団 (population) を構成するような “a

THE INDIVIDUAL AND NORMS IN PSYCHOLOGICAL THEORY

Rosenzweig. (7) p. 214

Theoretical Matrix	General-Experimental	Statistical-Psychometric	Psychoanalytic-Projective (Idiodynamic)
Objective	To establish principles of stimulus-response relationship applicable to the generalized human mind.	To allocate the individual in the group according to the distribution of various individual differences.	To reveal intra-individual (response-response or need-response) relationships for understanding the given case and for deriving principles of personality functioning.
Rôle of the Individual	An exemplar of responses in segmental stimulus-response behavior.	A constituent part or component of the group, the group being the basic unit.	A universe of events (idioverse) subject to analysis as a population.
Species of Norms	UNIVERSAL: functional criteria of behavior, usually implicit, conceived as operating, under the required conditions, without exception for all individuals.	GROUP: statistical standards, usually explicit, for measuring the individual's conformity to the average of the group or for placing him otherwise in the range of its distribution.	INDIVIDUAL: implicit or explicit terms of reference for understanding the behavior of the person in the context of what is characteristic or idiomatic of him.
Criterion of Normality	Frequency of the conditions that initiate lawful sequences of behavior, the infrequent being the pathological.	Frequency of end-product behavior in a given social group or culture, the infrequent being the abnormal.	Economy or efficiency in intra-individual organization, the uneconomical being the unhealthy.

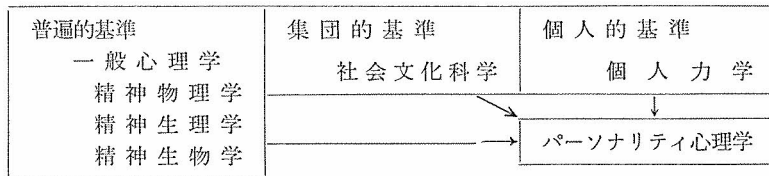
world of events”である。この第三の段階での approach が、彼の言う idiodynamics であり、本質的に（部分的な概念上の相異はあるが）Allport が morphogenic と呼び、より一般的に idiographic と呼ばれている approach に等しい。そこでは a person は、individual としての彼を理解するのと、intra-individual functioning の一般原理を導き出そうとするのとの、二重の目的をもって研究されることになる。この三段階の特徴を表示すれば、前ページの如くである。

一般性は科学の対象であり、個性は芸術や文学の対象であるという見解が古くからゆきわたっている。しかしこれに対して Allport は次のように言う。「……この提案はすてばちの意見である。心理学は若い学問であり、理想的には、抽象的・具体的両方の現象を克服するように進むべきである。それを一方向的に法則定立的な考え方に凍結してしまうのは早すぎる。われわれは、個人を科学の中にとどめておくべきである。」(2, p.13)

それでは、心理学を nomothetic と idiographic の二つの心理学に分けてしまう考え方はどうであろうか。前者は自然科学に属し、後者は精神科学に属する。前者は自然を説明し、後者は人間を了解 (verstehen) する。これも古くから多くの人によって唱えられたことであるが、また Allport は言う。「心理学を二つの相反する分野に分けることは、割り切りすぎである。…(略)…われわれは、なし得る限り、人間性に関するあらゆる知識から学んでならぬという理由はない。同時に、pattern をもった個性を了解させてくれるような概念と方法に目を開いていることが必要である」(2, p.14)

この点は、Rosenzweig ではより図式的で明確である。前表のように心理学の歴史上の三段階 (stages : 別に theoretical matrix とも言っている) という区分を考え、最近の傾向は第三の idiodynamic formulation に向っているけれども、同時に他の二つも、決してすたれてしまうのではなく、並存するものとして認める事によって、科学と文芸、自然科学と精神科学という dichotomy の問題から逃れていると言えよう。theoretical matrix はそれぞれに異った norm をもち、これに準拠して normality の criterion が定義されている。この norm の問題は Allport においても同様に考えられ、personology の位置を次の

Allport (2) p. 15



ように図解している。彼は、図中の個人力学を、Rosenzweig のそれと同一視しているようであるが、後述のように、Rosenzweig の idiodynamics は group norm や universal norm と関連をもつものであるから、むしろ Allport の personology の位置をしめるべきであろう。従って図中の個人力学は、強いていえば Rosenzweig のその、本質的ではありながらやはり一部分である。

ちなみに、心理学史の三段階といえは、R. B. Cattell による区分が思い起される⁴⁾。彼によれば、第一に文学的及び哲学的段階、第二に、組織的な観察と理論化による原臨床的 (proto-clinical) 段階、第三には、定量的・実験的段階である。彼の立場は、周知のごとく、Eysenck と並び称される nomothesis の急先鋒であるから、第三の段階のみを真に現代の科学的心理学として容認する。Rosenzweig の general-experimental 及び statistical-psychometric の両段階が、それぞれに Cattell の第二、第三の段階を発達的に経るという形で両区分は関係づけられよう。もし、idiodynamics を文学的、哲学的段階に対応させるならば、それは、Allport が否定した科学と文芸の dichotomy による科学の凍結を意味することになる。idiodynamic approach は、nomothesis の発展段階を示す Cattell の図式には、そのまま当てはめることは出来ない。問題は、それが全く別の独立した路線として認められるのか、それとも、Cattell の定量的・実験的段階——いわゆる自然科学の論理——と、何らかの角度をもって交差し得るものか、という点である。これについては、Allport も Rosenzweig も、十分な解を与えたとは言えない。

III

前述のA少年に対する非行予測検査は、まさに statistical-psychometric な予測であった。そこではこの少年は、集団の “constituent part or component” であって、“universe of events” ではない。それでは、どのようにして idiodynamics は可能であろうか。Allport は、morphogenic 及び semi-morphogenic な方法を列挙している。これを任意に整理しながら紹介しよう¹⁾。

まず個人の生活及至は世界を直接的に分析する手続きで、例えば Baldwin は、一婦人の書いた私信の長いシリーズから、彼女が婦人達や金や自然について語る “feeling tone” を観察し、息子に語るのと同じ文脈で他の何を語るかを考え、かくして彼女の unique thought structure を記述した。Baldwin は、これを “personal structure analysis” と名付けているが、これは、しばしば伝記研究にみられる方法に等しいと考えられる。

同様に、個人の生活の主要な構造的焦点 (major structural foci)、換言すれば、生活のテーマを見出す方法がある。H. G. Wells は、自分の生活には二つの大きなテーマがあり、一つは world government への関心であり、他の一つは sex への関心であると言った。転向後のトルストイは、ただ一つのテーマ、即ち “simplification of life” によって生きたと考えられる。P. B. Perry によれば、W. James は八つの dominant trends をもっていた。また Allport 自身の調査によれば、学生達は平均7.2、3及至10の essential characteristics によって友人を十分に特徴づけることが出来た。この方法はさらに発展されるべきであるが、この中心的モチーフを何と名付けるか、未だ明確ではない。

視点をやや変えて、個人の価値体系を調べてもよい。「世の中で、何にもましてしたいのは何ですか」、「どういう経験が、貴方に、完全な感じや、十分に活動したという感じや、自分を確かめ得たという感じを与えますか」といった直接的質問を用いる。Allport は、client の「信頼される権利」を重視し、客観的妥当性だけを問題とするのでなしに、client の自己認知をとりあげて併用すべきだと強調している。Kilpatrick と Cantril は自分の想像出来る限りの最良の理想的な人生を記述させ、これを十段階のハシゴの最上段におき、さらに最悪の人生を記述させて、これをハシゴの最下段に位置づけた上で、今はハシゴの何段目に居るか、二年前は何段目だったか、五年後はどうなると思うかなどと問うてみる方法を考えた (“self-anchoring scale”)。

この様な時間経過を実際に追跡したのは Shapiro の方法である。そこでは、五時間にもわたる徹底的な面接にもとずいて、その個人に適切な質問票が作られる。これを基準として、何ヶ月或いは何年後かに追跡調査をすることによって、個人の発達過程をみようとするものである。

また、personal expression のどんな記録でも、どんなに複雑な事例報告やテスト・プロフィールでも、それらを matching させるのは、因果関係についての洞察を与えはしないが、完全に morphogenic な方法であると述べている。これは、一般に case study において、特にそれと意識せずに多く用いられていることであろう。

これらの方法は、いずれも、general あるいは dimensional な norm を用いないで、個人の Personal structure の内的且つユニークなパターンを調べる事の可能性を示していると考えられる。さらに Allport は、部分的には dimensional でありながら、個性記述に極めて有効な方法—semi-morphogenic method として、評定法の特殊な利用、Kelly の Role Construct Repertory Test, standard test の特殊な解釈法、Allport-Vernon-Lindzey Study of Values, Stephenson の Q-sort をあげているが、ここでは詳述しない。

Allport が projective method について特に言及していないのに対して、Rosenzweig は、これを中心の課題として論述している⁷⁾。彼によれば、投影法は、idiodynamic approach を少なくとも三つの密接に関連した aspect で具体化する。その aspect は、response dominance, configuration dominance,

及び idioverse dominance と呼ばれる。従来の実験心理学及び psychometric approach は、刺激と反応の関係が行動理解のカギであるとして来た。しかし投影法による idiodynamic approach においては、「刺激はその王座を追われ、反応の優位がこれに代った。その個人における諸反応相互間の関係が、今や根本的な関心の的である」(7, p.215). response-response relationship は、さらに need-response relationship を反映するという点からも重視されねばならない。そして外的な刺激は、単なるひき金 (trigger) あるいは口実 (excuse) にすぎない。何故ならそれは、それ自体がすでに the individual によって多数の外的刺激の中から選択され、解釈されたものなのだからである。このような精神分析学の影響に、さらに Gestalt 心理学が補いをつける。個人の行動の全体性は、彼の反応の pattern のうちに秘められて居り、個人の世界 (the world of the individual) という essential totality の中で、刺激も反応も相互限定的 (mutually definitive) である。この世界、すなわち individual's universe of events は、その複合による新語で “idioverse” と呼ばれる。idioverse dominance と configuration dominance と、response dominance とは、従来のテストの構成や実験計画法とは相容れないが、これを前提としてはじめて、projective techniques の conceptualization が可能であると彼は主張するのである。

Rosenzweig の言うところは、ごく抽象的であるが、その一つの結実した姿が P-F Study (Picture-Frustration Study)であろう。彼によれば⁶⁾、欲求阻害事態での生活体の vital defense のあり方は、その個体独自の統一性の具体的な表現である。そこで P-F Study は、「……個体の独自性が最も現われやすい自我水準において、且つ個体の要求を阻止した場面の自我防衛反応を組織的に誘発させて、かくして得た種々の言語表現を手掛りにして、その背後にある自我の動機関係を探ろうとする……」(8, p.57) ことを目標とし、標題も、“test” とはされず “study” とつけられている。即ち「idioverse dominance の postulate に従えば、投影法は、普通の意味でのテストと受けとられるべきではないと言える」(7, p.217). group norm や universal norm のおしつけでない idiodynamic な方法は、test と呼ばれてはならないのである。

しかしながら、ここで具体的なテスト批判をする余裕はないが、P-F Study が彼の主張を十分に具体化し得ているかどうか、いささか疑問なしとしない。様式の制約による projectivity の限界、いわゆる overt level での語義的解釈⁸⁾と内的パターンの関係、標準の設定や GCR (group conformity ratings) による nomothetic な特性の混在などが認められるので、Allport の分類にあてはめるならば、semi-morphogenic method に属すべきものであろう。具体的な方法の確立は、常に、特に idiographic な接近においては困難である。Allport は、「我々の conceptual な flexibility は、methodological な flexibility よりも大きい」(1, p.415) と言っている。

実存主義の立場からの接近、いわゆる実存分析や現存在分析は、本質的に極めて idiographic な接近法と言える。例えば Binswanger が心理療法における人間関係を解釈する時、そこに用いられる In-der-Welt-sein や Begegnung などという Heidegger の哲学用語は、本来、idiographic なものである。また Binswanger は「夢と実存」の中でこう言っている。「……人間は、夢みるとき『生命機能』であるが、覚醒するとき、彼は『生命史 (生活史)』を創る。しかも、彼は自己に固有な生命の歴史、すなわち『内的生活史』を創るのである……」(3, p.154)。しかし Allport は、実存主義者の見方を極めて高く評価しながらも、特殊な方法を何ら提供していないという点で、方法論上の創造性が発揮出来ていないと評している^{1), 2)}。

IV

ところで Holt, R. R. は、Allport を nomothetic-idiographic dichotomy の「第一の代表者」とみなして、激しく批判している⁵⁾。(この論文は Allport の(1)と同誌同号に並べられているが、相互に連絡のある誌上討論かどうか、明かにされていない。) Holt は、「彼 (Allport) の中の詩人が、彼の中の科学者の目を曇らせている」(5, p.377) ことを示すのだという言葉をもって、まず歴史的な考察から始めている。

彼によれば、18C.の自然科学の発達、19C.に入ってから romanticism の温床であると言う。そこでは、「自然科学の終らない限り、実在は、秩序立って、観察可能で、分類可能で、機械的な説明の可能なものであると考えられていた。生命の秘密も、physico-chemical formulas にやがて還元されるものと期待されていた。このために起る宗教や humanism との衝突は、よき科学者たるためには不可避のなりゆきと見られた」(5, p.379) のである。これに対する反動として、19C.に入ってから、Dilthey, Windelband, Rickert などによって、要素の定量化に対する understanding (Verstehen) の優位性が唱えられ、自然科学と精神科学の二分法が主張された。Holt は、これらの主張の科学史的意味を否定はしない。むしろ、生身の人間の内的な生活を見落していた当時の科学の片手落ちを指摘し、Gestalt 心理学に苗床を用意し、personology の基礎となった彼等の功績を認めている。それにもかかわらず idiographic approach に対して彼が激しく批判するのは、要するに現代の科学においては、この dichotomy はすでに止揚されて無意味になっており、未だにこれを主張するのは現代科学に対する誤解であり、従って、いたずらに問題の多いこの二分法は用いられるべきではない、ということのようである。しかしそこには、Holt の曲解もまた認められるように思える。

彼は「romantic point of view」(と彼は呼んでいる)の主張を七項目の命題にまとめて、その各々について批判しているが、ここでは、その命題を箇条書きにし、批判は後に反論を加えながら紹介しよう。

1. personology の目標は、understanding でなければならない。prediction や control ではない。
2. personology の固有の方法は、intuition と empathy であり、これは自然科学にその座をもたない。
3. personology は、心理学の他の客観的な領域とは対照的に、主観的であって、定量化の出来ない value や meaning と関連する。
4. personology の概念は、individualize されていなければならない。自然科学の概念のように、一般化されているではない。
5. personology で認められる唯一の分析は、abstract ではなくて structural である。一方自然科学は、structure には関心をもたない。
6. 人間の事象においては、偶然と自由意志が働らくから、personality の general law はあり得ない。
7. personology の対象事象は、自然科学には座をもたないような unique individual であるから、ここでは general law は不可能である。

ここで注意しなければならないのは、これらの命題が、idiographic personology の本性を適切に表現しているかどうか、ということである。Holt は、これらの命題のいくつかに対して、科学に対する誤解であると言っているが、むしろ彼の方が誤解した命題を立てているようである。

例えば命題 1, 3, 7, について、彼は idiograph の立場を誤解している。Allport は morphogenic psychology の科学的価値の一つとして予言力を認めている。「morphogenic interpretation は、検証可能で、communicable で、予言力をもたねばならない」(1, p.410). statistic な予言の方が clinical な予言より適中したという Meehl の実証を Allport は認めているが、だからこそ、morphogenic method の予測性をさらに高めようとするのであり、また同時に、いわゆる“cook-book method”の限界を指摘しているのである¹⁾。また、Allport の言う前述の morphogenic 及び semi-morphogenic な方法からも、Rosenzweig の方法からも知られるように、idiographic approach は必ずしも量化和無縁ではない。ただそれが、individual norm のうちにおいてなされるところに特徴がある。しかも Rosenzweig の idio-dynamics では、group norm や universal norm の援用さえも、重要な方法として認められているのである。「group norm や universal norm の意味は、individual norm の場合と同様に、idioverse dominance と全く矛盾しない。しばしば、投影法の反対者からも賛成者からも、この道具を individual norm だけの approach と考えるという誤りがなされる」(7, p.217)。この事によってこそ、前述のように、idioverse のうちにおける intra-individual functioning の一般原理を導くことが可能なのである。従って、general law は不可能であるという命題も、Holt の誤解にすぎず、これらに対する彼の批判は、

特に顧慮するにあたらぬ。

彼は命題2に対して、科学者が発見や仮説構成の段階で大いに intuition を用いるから、これは自然科学に座をもたないというのは誤解だとしている。また命題5に対して、現代の科学で structure の概念は広く用いられており、またここには、abstraction に対する誤解もあるという。命題7に対しては、自然科学でも太陽や月や個々の台風のような“individual”な対象が nomothetic に研究されているから、unique individual が自然科学に座をもたないという事は誤りであるという。これらの批判は、それ自体としては誠にどもっともと言わざるを得ない。しかし、いかに台風が個性的でも、それと人間の個人とを同一視することには飛躍があるし、科学者が直覚によってアイディアを得ることと、対人理解における intuition や empathy とを同一に論ずるのも、全くの形式論と言わねばならないであろう。さらにこれらの批判は、かりに認められたとしても、命題の全文を否定し去る事にはならないから、結局は、自然科のなかに、idiographic personology と或る点で類似の過程が認められる、と言っているにすぎないことになろう。

命題1については、understanding は芸術家の仕事であるとして、芸術を選ぶか科学を選ぶか、と Allport にせまる。これについての Allport の見解はすでに述べた。命題4の概念の問題については、Allport も Rosenzweig も、あの難解な哲学用語を駆使するので評判のわるい Binswanger ですら、communicable でない概念を用いようとはしていない。Holt は、個人の unique trait を記述するためにいちいち unique word を創作するならば、コミュニケーション不能になると言っているが、全く無意味なことである。一方彼は、現存の用語を複雑に組み合わせ、[いいようもないほど individual なもの]を表現しようとするのは誤った努力であるとも言っている。さらに Max Weber の所説を引用して ideal type よりさらに抽象した概念が、particular individual と、segmental にではあるが、むしろ一致することを述べている。これでは idiographic な特性は失われてしまうが、たしかに、概念化と communication の問題については、方法論の不備と共に、今後研究すべき余地が認められるようである。

要するに Holt の批判の在り方は、全般的にみて、この両接近法を、ある部分では過当に対立的な両極として把えてそれを否定し、ある部分は形式論的に自然科学——つまりは nomothetic science——にも共通の事であるとして idiographic approach の特性を解消せしめ、かくして、この dichotomy はすでに止揚されているかのように結論づけているものと考えられる。

V

さて臨床心理学の分野では、はじめの A 少年に対するような actuarial な予測は許されない。残りの20人の中に、この少年を入れる可能性はないか。B氏を入院させるべきか否か。C子の夜尿症はどうすれば治るのか。D君の職業適性はどうか。E夫人の対人恐怖はどうして起ったか。これらの問題は、psychometrics では解決されない。会社がノイローゼになる可能性についての一線をひいて、危険域に入った者は採用しないという採用試験用精神衛生検査の方針は、統計的法則に従った処置として大いに有効である。しかし、A少年の場合と同じく、個人における発病の内的必然性については、ここでは何も語られていない。そこで、個人をその unique structure として把えねばならない臨床心理学こそ、idiographic approach の場ではないか、と考えられる。

臨床心理学は、常々、不適応行動や精神障害と関係して考えられている。しかし、clinical という言葉が“bed side”を意味するからといって、異常現象への approach に固執する必要はない。異常心理現象は、それが nomothetic approach によって追求されるならば、異常心理学の対象である。異常だと正常だとを問わず、idiographic な接近法を臨床心理学の本質的な特性として認める事は、“bed side”の意味とも矛盾しない。しかしながら、ここで臨床心理学の定義論を展開する事は出来ない。今は、広義に解釈された idiographic approach が臨床心理学の本質であると考えた上で、その広義という条件に少しくふれてみたい。

個人の内的構造をとらえ、内的力動性を問題にし、個人における特殊な意味を理解し、そして究極的には、Allport の言う “Billian quality of Bill” を追求する approach は、いろいろな名称で呼ばれて来たが、ここでは idiographic を用いる。力動性を強調する意味では、Rosenzweig の idiodynamic が適しているであろうし、個別性の生成発展を重視するならば、Allport の morphogenic がより妥当であろう。しかし、すでに Windelband から独立して一般化した用語を用いる方が、概括的な用語としては便利であろうと思われる。

idiographic approach は、上の目的を果すために、intuitive な understanding であろうと量的・因果的な説明であろうと、universal norm であろうと group norm であろうと、projective method であろうと psychometric test であろうと、出来得る限りの方法を駆使するものである。これが可能なことであり、何ら矛盾するものでないという事は、これまでの記述、特に Rosenzweig において明かである。さらにその対象は、文字通りの個人である必要はない。individual or unique case として扱われ得る限り、例えば一家族、夫婦、何かの有機的な小集団はすべて “idio-graphic” である。このような自由な手続きをとりながら 仮説的な解釈、説明、予測が逐次的に検証される過程——津島によって free-floating attention と呼ばれる⁹⁾——を経て、結果的に個人の内的生活の描かれたのが idiograph であり、それを志向した全過程は、その中に nomothetic な方法が含まれていようと、idiographic approach であると、——Holt にあげ足をとられないように——広義に解釈をした用語とする。また、この様な解釈こそが、この dichotomy を真に止揚する道を開くのではないだろうか。

引用文献

- 1) Allport, G. W. The general and the unique in psychological science J. Person. '62. 30. 405-422.
- 2) オールポート著 今田忠監訳 人格心理学 S. 43 (Allport, G. W. Pattern and growth in personality '61)
- 3) ビンスワンガー著 荻野恒一訳 夢と実存 S. 35 (Binswanger, L. Traum und Existenz '47)
- 4) Cattell, R. B. The scientific analysis of personality '65
- 5) Holt, R. R. Individuality and generalization in the psychology of personality J. Person. '62. 30. 377-404.
- 6) Rosenzweig, S. An outline of frustration theory (in Personality and the behavior disorders ed. Hunt, J. McV. '44 vol 1. chap 11.)
- 7) Rosenzweig, S. Idiodynamics in personality theory with special reference to projective methods Psychol. Rev. '51. 58. 213-223.
- 8) 住田勝美, 林勝造, 一谷強 ローゼンツウィク人格理論 S. 39
- 9) 津島忠 臨床心理学の科学的意義 心理学評論 '57. 1. 2. 254-268.